

2 評価委員による評価

○小橋委員

令和4年度に千葉市教育委員会が執行した学校教育に関わる事務について、総括的所見(全体について)、重点項目の所見(生命(いのち)の安全教育推進、小学校ライトポートの設置(不登校対策))について意見を述べる。

全体について

令和4年度は、第2次千葉市学校教育推進計画の最終年度となる。平成31年3月の中間見直しからの変遷を確認した。この期間は、ほぼコロナ禍での教育活動であり、予期しない出来事の中、工夫を重ねて各施策を実施してきたことがうかがえる。その中で、新たな視点や可能性に気づいたことや、意味を問い直すこともあったのではないだろうか。見えてきた課題を次の問いにし、実情に沿った施策へと繋げてほしい。

設定目標に対しての令和4年度末までの達成状況は、多くの「達成」が見られる。未達成については、計画の途中でのコロナ禍もあるだろうが、無理のない設定かを再確認してほしい。また数値での評価はしない主観指標の「分析・考察、今後の取組み」についても述べたい。特に「主体的に学ぶ力の向上」「豊かな心の育成」「社会的自立に向けた強い心の育成」「教職員の資質・指導力の向上」「特別支援教育の充実」「いじめや不登校の未然防止と早期発見・解消」「学習や社会生活が困難な子どもへの支援」での記載内容は、教職員が直接かかわる箇所だろう。そこで書かれている授業の工夫も様々な改善も教員と児童生徒が日々向き合う中での実態把握や理解から生まれる。今後、教員がそれらに取り組む時間や考える余裕が十分確保されているか、教育施策が学校や教員に必要以上の負担になっていないか実態把握をしながら計画をしてほしい。

生命(いのち)の安全教育推進

千葉市では平成30年に発覚した教員による事件をきっかけに、子どもたちへの「性の人権教育」の充実を目指す取り組みの一つとして、子どもたちが性暴力の加害者、被害者、傍観者にならないよう生命(いのち)の安全教育を実施している。稲毛小学校において、授業の視察及び、教育職員課から事業の説明、学校長から取り組みの説明を受けた。

(1) 各取り組み

「教育・啓発」「相談体制」「周知」「点検」の観点から実施内容について報告があった。学校長が学校の死角となっている場所の点検や声掛け等を実施していることや、養護教諭対象に被害児への聞き取りの研修実施の報告等があった。子どもを性暴力から守る仕組み等の説明もあった。千葉市の各取り組みについては、全国的に見ても進んでいるものといえよう。今後も、それらの仕組みや取り組みが、適切に機能しているかを検討してほしい。

(2) 児童生徒への教育

見学した授業では、「子どもの権利」を児童が自分ごととして考え、日常のことから具体

的にイメージを広げられる内容であった。さらに自分が相談できる人や場所を確認できるような時間もあった。児童が集中して取り組めるよう 20 分程度で行う工夫があり、内容も学年に合わせて実施しているということである。毎年、繰り返し行うことで、児童生徒自身が再確認できたり、新たな気づきを促したり、授業者である教員自身の意識の変化にもつながると説明を受けた。授業があることで児童生徒を通して保護者への啓発にもなるだろう。また千葉市教育委員会では資料作成等もされているが、閲覧や配布だけで終わらないよう、指導の工夫を考えるための教員への支援や、新任教員も実施できるような情報共有、教材や活用可能な補助資料の充実も継続的に必要であろう。さらに教材使用や強化月間の時期等についても、それぞれの学校や児童生徒の実態に合わせて実施できるよう授業者や学校の裁量範囲の幅も検討の余地があるかもしれない。

小学校ライトポートの設置（不登校対策）

不登校は、全国的にみると平成 27 年から令和 3 年までで約 2 倍に激増している。同期間の千葉市では小学生が 2 倍以上で増加している現状がある。現在の不登校対策では、子どもたちの社会的自立や学校復帰に向かう環境づくりのための支援の整備が急務とされている。そのような中、千葉市では集団生活への適応や社会的自立を手助けする場として「ライトポート」を設置している。今回は令和 4 年度に大森小学校内に設置された小学校ライトポート中央において実際の活動を視察し、教育センター職員から事業の説明、ライトポートチーフ指導員より活動や現状の説明を受けた。

（１）系統的で実態に即した支援

千葉市の不登校対策では「個別での支援」「少人数での支援」「集団での支援」「多様な支援」と児童生徒の希望と実態に合わせ相談して選べるような場を設けている。不登校の理由は一つに絞ることはできないと言われている。児童生徒の状況や家庭環境、背景も益々多様になっている。今後も児童生徒の状況に合わせて、支援内容を選ぶことができるよう、周知の在り方や各支援の接続等をその都度検討をしながら継続してほしい。

（２）設備の拡充と小学校との連携

設置されている大森小学校にはライトポートで学習指導ができる教員の加配が令和 5 年度からあり、小学校とライトポートを繋ぐ役割を担っている。そのことで、設置設備や活動の実施等がより生きて動いてきたといえる。今後も加配の計画と実施を継続してほしい。またライトポートに関しては現在各区で 1 か所となっている。自宅から 1 時間程度かけて保護者の送迎で来る児童生徒もいるそうである。行きたいと思った時に行ける物理的・心理的な距離の確保や、安全の観点からも状況を把握しながら増設の検討も必要だろう。

（３）指導員の拡充

ライトポート等の運営が円滑に進み、児童生徒が安心して行くことができるのは指導員の影響が大きい。しかし指導員は全員非常勤職員であり、上限の勤務時数が決められている。児童生徒が指導員を必要としている時に来ることができなかつたり、指導員自身が給与面で勤務を継続することが難しかったりする状況といえる。先を見据えて各児童生徒の支援計画をたて、育ちを継続的にみていくためには、指導員も児童生徒も安定し双方が信頼に基づく

関係性をつくることができる環境を整えることは急務ではないだろうか。指導員が正規職員として勤務できるような雇用形態の見直しも必要であろう。

○岩崎委員

令和4年度千葉市教育委員会が執行した生涯学習関連事業に関わる事務について、以下、総括的所見（全体について）、及び「加曽利貝塚博物館」と「科学館」の二つに焦点をあてて評価に関わる意見を述べる。

全体について

「千葉市基本計画」の新たな策定に伴い、生涯学習関連事業においても行政指針となる「第6次千葉市生涯学習推進計画」が改定され、令和5～14（2023～2032）年度に実施に移される。新たな方針策定時にはそれまでの取組みの総括が重要となるため、令和4年度にはその作業が多く行われたと推察する。例えば、推進計画策定の基礎的資料として市民対象に行われた「令和3年度千葉市生涯学習基礎調査」（n=1,006）の報告書（令和4年3月）によれば、千葉市民が「生涯学習活動の意義」として一番多く挙げているのは、「生きがいづくり」（36.0%）であり、また、「生涯学習活動を行う上で最も重視していること」として一番多く挙げているのは、「人生を豊かにする」（45.0%）である。

近年では、「社会人のための学び直し」といった雇用に関わる個人に帰属する学習が重要視されがちだが、この調査によれば、地域に根ざした対話、関わり合い、協働を通じて培われる、生きがいや人生の豊かさをもたらす学習への市民ニーズが高いことがわかる。このような市民ニーズがあることを、生涯学習関連事業を行う上では十分認識する必要がある。

同時に、個人の学習意欲を喚起するものとして、今回視察し評価の対象とされた「加曽利貝塚博物館」と「科学館」は、千葉市が有する教育・学習施設として、その充実は重要である。「令和3年度千葉市生涯学習基礎調査」（n=1,006）によれば、「1年間市民が利用した施設」として最も多いのは図書館で27.8%である。それに対し、科学館は6.0%、加曽利貝塚博物館は2.8%となっている。一方で、「今後利用してみたい施設」の数字を見ると、科学館は14.8%、加曽利貝塚博物館8.1%である。

生涯学習は個人の自発性に委ねられるものであり、市民の施設利用の多寡を問うことは行政的には難しいことであろう。しかし、「今後利用してみたい施設」と「1年間市民が利用した施設」の差に関して注目すれば、利用したいとする層に対してさらなる働きかけを行うことは重要である。新型コロナウイルスの感染拡大防止で利用の自粛が解除されつつある今日、魅力的講座・イベントなどの周知により、よりアクセスしやすい施設づくりを目指して欲しいと思われる。

加曽利貝塚博物館

（1）市民の関心喚起

加曽利貝塚は、南貝塚と北貝塚からなる8字形からなるムラ貝塚として日本最大級の集落遺跡であり、都市アイデンティティの一つとして千葉市が誇るべき史跡である。

博物館の展示には、高度経済成長期、宅地造成のため開発が進められようとしていた北貝塚地域について、市の文化財審議会を中心に保存に向けた動きが加速し、県立高校や近隣の

市立中学校、その他、地元の人々が参加して発掘調査を実施、街頭署名などによる市民の賛同によって市による用地買収に至ったとの解説がある。南貝塚と北貝塚からなる現在の状況が、千葉市民の手によって守られたとのストーリーは、千葉市民全体で共有されるべきことであり、その偉業を半世紀たった今、再度広く市民に伝える必要があると思われる。

ホームページにおいては、「館長の考古学日記」、職員の「加曾利の人●（イニシャル）の部屋」などの内容は面白く、学術的内容をわかりやすく情報発信する積極的取組みを継続的に行っていることは評価できる。ツイッター（現在はX）による発信も加曾利貝塚を身近に感じる内容である。千葉市のホームページなどに広くリンクが貼られることで、より児童・生徒や市民の目に触れるような仕組みができると良いと思われる。

夏休み中に開催される「学芸員になんでも聞ける縄文自由研究相談室」の企画は良い。ただし、加曾利貝塚博物館へのアクセスが、近隣住民以外はバス、モノレール、自動車などの交通手段によらざるを得ないため、子どもが相談室に来るためには保護者の帯同が必要となり、相談室の利用は保護者の教育意識に左右される恐れがある。そのため、よりアクセスの良い施設を利用した出張相談室の開催が考慮されても良いように思われる。その意味では、すでに行われている、千葉市生涯学習センター、稲浜ショップ、高洲ショッピングセンターなどの出張展示は良い試みである。小・中学校への「自由研究相談室」などへのアウトリーチやレブリカ利用によるモバイル・ミュージアムなど、柔軟な発想で子どもがより身近に加曾利貝塚博物館の教育資源が利用できる工夫がなされることが望まれる。

そのほか、交通手段としては、千葉市シェアサイクル事業のステーションがあることは良い。シェアサイクルにより千葉市に点在する施設を回るバイク・ツアーなどを企画することで、加曾利貝塚博物館に足を運ぶ市民が増えることを期待する。

（２）施設整備後の教育資源としての活用

新しい博物館建設のグランドデザインが市から提示されており、今後、それに沿って新しい加曾利貝塚博物館が整備されていくことになる。新しい施設活用についてのコンテンツについては、事前に検討されることが望ましい。市民の意見をワークショップなどで吸い上げ、市民参画によるプログラム構築も一考であろう。

今後、動物公園や科学館、学校等と連携し、相互交流を伴う事業を展開するとのことであるが、そのほか、図書館と連携し縄文関連の所蔵書籍の共同展示を行うことや、生涯学習センターと連携し成人向けの学習プログラムの一層の充実を図ることも一考であろう。また、教育センターと連携し、児童・生徒向けのプログラム策定や学校の教員に対する講座提供の検討なども、以前アイデアとして伺ったが、この機に積極的に広げていくことも望まれるであろう。

このような連携に関しては、同様の縄文時代貝塚遺跡の活用を進める市原歴史博物館との資源活用、交流等の連携協定を締結したことは高く評価できる。今後も、千葉市内外の学習の場との有機的連携により、加曾利貝塚博物館の意義を社会に広めてもらいたい。

千葉市科学館

千葉市科学館は、「科学都市ちば」の象徴的施設である。「来館者との体験の共有」を掲げ、立地も良いことから、参加体験型科学館として一定の集客に成功している。迫力ある映像のプラネタリウムも魅力である。科学館の入館者数の増加や科学教育事業への参加数の増加は、広く科学館が市民に活用されていることを示す一つの指標であろう。

今回、科学都市戦略の拠点としての機能を向上し、「科学都市ちば」の実現を進めるため、令和4年5月～9月末で展示物のリニューアル施行を実施したとのことである。その際、研究の最前線で活躍する研究者に展示の監修を行ってもらったことは良い取組みである。企画には、科学的センス、深い学術的素養と見識が必要であり、所長が科学者であることは以前から高く評価してきたところである。千葉大学をはじめとして、千葉市内の大学や研究機関の研究者を積極的に登用していることも良い試みと思われる。そのような大学・研究機関とのコラボレーションが展示のみならず、様々な面で展開されることが望まれる。

また、今回登場した、学術の最先端を紹介する南極ニュートリノ検出器「アイスキューブ」や小惑星探査機「はやぶさ2」などの新しい展示はとても良いものである。新しい事実を発見するといったワクワク感を与えてくれるこのような内容については、サイエンス・コミュニケーターがワークショップを行うなど、よりわかりやすい解説などの働きかけがあると、その意義が一層高まると思われる。その点では、小学校への科学館出張授業「おもしろ教室」などのアウトリーチ活動などにより、子どもの日常に科学が浸透する取組みを実施していることは高く評価できる。さらには、日本の製造業の基盤となる町工場でのものづくりの技術などの内容もより充実すると、子どもに身近な興味も持たせる契機になる可能性もある。

科学の今を伝える学術性を持った「高度化」、そして学校教育への活用や市民の教養醸成といった「大衆化」といった異なる二つのベクトルを持った戦略的方向性を実現することは難しいことであろうが、科学館にはその難題に果敢に挑戦して欲しく思う。千葉市が「科学都市ちば」として、その実態を誇れるようにするためには、千葉市科学館には先導的役割があり、ぜひその使命を遂行していただきたい。

「第6次千葉市生涯学習推進計画」の新たな方針においては、多様な学習機会の充実のために、多種多様な学びの機会の確保、市民の学習活動の支援が謳われている。加曽利貝塚は「郷土や地域への愛着を深める学習機会の提供」として「特別史跡加曽利貝塚の魅力向上」のため、そして「科学館」は「市民ニーズに対応した学習機会の提供」として「科学関連学習事業の実施」のため、いずれも重要な施設と考えられており、拡充される方向性が示されている。いずれの施設も、現状において多様な学習機会の提供に十分努めていると評価できるが、新しい方向性に向けて、市民の学習機会の提供により一層の工夫や尽力がなされることが望まれる。さらなる発展を期待したい。